

編集後記：7月号掲載の総会議事録に拠れば、5月下旬現在の通常会員数は3970名に昇るそうである。つまり、毎月初めには4000名近い会員の皆さんがこの「天気」の冊子を手にとられるという訳である。その中で、ご自分で書かれた記事が掲載された経験をお持ちの方はどの位いらっしゃるのかとふと気になった。研究者や気象業務関係者でも、自主的に投稿できるのは論文、短報ぐらいと思っておられる方も案外少なくないのではなかろうか。ましてやそれ以外の方々の目には、「天気」が学会からの一方的な情報伝達媒体としてしか映らないのではという懸念もある。

そこで会員の皆さんには、是非一度本誌1月号の巻末をめくって頂きたい。内容案内(p.69)を見ると、「天気」の記事には実に23もの種類があり、その半数近くは読者からの自主投稿でしか成り立たない質のものであることが判る。その中には「質疑応答」や「会員の広場」など、会員の皆さんからの素朴な疑問や自由な意見の受け皿として設けられたものもある。また、ご自分の撮った写真で巻頭の「カラーページ」を飾ることもできる。一方、海外の学会に参加の機会があったら「シンポジウム」に報告記事を書いて頂けたら幸いだが、それを重荷と感ずる向きには「海外だより」に印象記風のものを書かれてはいかがだろう。海外の学術誌や学会にて研究発表された方には、そのエッセンスを「最近の研究から」に気軽にまとめ、自己PRにも役立てて頂きたい。

さらに、基本的に編集委員会からの依頼執筆で成り立っている記事の多くが、会員からの自主投稿も同時に受付けていることも判る。年間数編掲載される「解説」記事のうち1~2編は、実は自主投稿によるものだ。査読を受ける「解説」に仕立て上げるのがもし億劫なら、これも「最近の研究から」に最近の進展を中心とした気軽なレビューを書いて頂ければよい。また、気象学に関係ある本を読み終えたなら、その批評を「本だな」に寄稿されてはいかがだろう。

勿論、お寄せ頂いた原稿が無条件で掲載される訳ではない。読者に一層有益な記事とし、かつ誤解を招かぬ配慮から、編集委員会から加筆・修正を求められるケースが多い。また、内容に依っては掲載をお断りするケースもある。しかし、記事の種類が23にも昇る理由の1つは、各々色々な立場で気象学に関わりを持つ会員の皆さんが、機関誌である「天気」に何らかの形で寄稿できるようにするためである。つい先日も大学院生の1人が、「この間行ったヨーロッパの学会の様子を是非紹介したいので」と、投稿原稿の草案を持って来たので嬉しくなった。1人でも多くの方がご自身の筆による記事の載った冊子を手にとられて、学会活動に参加していることを実感して頂ければと思う。そうすれば「天気」が、貴方にとっても他の会員にとっても、今一層面白いものになるはずである。尚、寄稿の際には、「内容案内」に引き続き「投稿案内」を是非参照されるよう編集委員としてお願いしたい。(中村 尚)

「天気」編集委員会

編集委員長 新野 宏(理事)

編集委員 神沢 博(理事)・関口理郎(理事)

藤部文昭(理事)・石田純一

植田宏昭・小田切さやか

大淵 濟・金田昌樹・川島正行

木下 仁・小出 寛・小司禎教

住 明正・関山 剛・田口晶彦

高橋 宙・高山 大・寺坂義幸

中村 尚・新村典子・板東恭子

別所康太郎・水野孝則・水野 量

山本 哲

地区編集委員 北海道 若原勝二・向川 均

東北 小柴 厚・早坂忠裕

関東 河原幹雄・竹内 仁

中部 永尾一平・井上長俊

関西 和田高秀・山中大学

九州 金崎 厚・中島健介

沖縄 仲大安英

編集書記 遠藤和子